



南極

第21号

平成16年10月21日

南極倶楽部会報

幻の利根川水路—宗谷ノート(3)

高尾一三

1次(1956年)の航海で宗谷は南緯66.5度以南の南極海に入ってから約1週間の調査航海後いよいよ1月16日プリンスオラフ海岸(宗谷海岸「極地研NEWS164号p.12」)の調査に入った。そしてセスナ機を飛ばす開水面をもとめ南進を続ける。まずヘリコプターを飛ばし水路の調査にあたる。前方約17マイルに開水面を発見、その開水面で念願のセスナ機を飛ばす事が出来た。いまこの地では午後11時30分頃日が沈み約2時間後の午前1時30分頃日が出る白夜である。この日のセスナ機による約3時間にわたる調査飛行の結果、ラングホブデー帯の露岩を発見し、また南に向かい大陸からの定着氷に続く水路を発見した。この白夜の飛行は大成功であった。

17日、船長の「これで調査は終わり突入だ」の弾んだ声、前日には船尾バラスタタンクに約144トンの海水を張り喫水を深くして万全の備え、いよいよ40度線を南に突入した。

この東経40度線は(1)氷堤の断

崖が少ない(2)岩が出ている(3)水路が開いている(松本船長談)と云われ上陸候補地プリンスハラルド海岸への侵入線である。

その後は天候にも恵まれ、ヘリコプターの誘導によりオープンパックを南進する。時には冰山を迂回し時には密群氷を砕氷前進、南緯68度線を突破、18日未明には東西に横たわる冰山の浮かぶ開水面に入る。この付近の開水面を一名利根川水路といい、当時の私の記録では概位、南緯68.3度、東経40度一帯に存在していた。ここから昭和基地まで南へ直線距離で約40マイルである。その後宗谷は、ヘリコプターの誘導により密群氷内の水路を求め、あるいは本格的な砕氷を行い南進し、25日には大陸に続く定着氷に接岸した。

2次の航海では南緯68度線を突破し、存在するであろう利根川水路を通り南下して大陸に続く定着氷に到達するのが夢であった。しかしリュツォ・ホルム湾の気象は宗谷にとっては非情であった。その時の気象状況は……………

| 日時 | 最大風速 | 風向 | 航走距離 | ヘリ氷状調査 | 天気 |
|--------|---------|------|---------|--------|-------|
| 12月26日 | 3.2 m/s | EAST | | 2回 | 曇り |
| 27 | 4.7 | WEST | 3.0 マイル | | 曇り |
| 28 | 4.5 | WSW | 9.0 | 2 | 曇り |
| 29 | 5.5 | NE | 11.8 | 4 | 曇り |
| 30 | 3.3 | SW | 2.8 | 2 | 曇り |
| 31 | 14.7 | ENE | 0.0 | | 曇りのち雪 |
| 1月1日 | 15.5 | ENE | 0.5 | | 暴風雪 |
| 2 | 13.7 | EAST | | | 雪 |
| 3 | 8.7 | EAST | 0.0 | | 雪 |
| 4 | 5.2 | WEST | 100 (m) | | 雪 |
| 5 | 4.6 | WNW | 1.0 マイル | 1 | 曇り |
| 6 | 2.8 | ENE | 1.7 | 1 | 曇り |
| 7 | 7.7 | ENE | | | 曇りのち雪 |

上記で見るように突入後5日間は比較的安定した気象であった。しかし31日の瞬間風速20 m/sに達する強風は宗谷の前進を阻み、その後1週間は前進極めて困難、一進一退を繰り返し遂に1月7日(南緯67度45分、東経39度06分)の位置で漂泊待機、以後ピセットの状態で30日まで23日間、西方に流された。31日の強風は宗谷の砕氷能力の限界を思い知らされた現実であった。

2次での南緯68度線突破の夢は遂に消えた。果たして利根川水路は存在していたであろうか。宗谷にとって利根川水路は幻の水路となった。この苦い経験から3次以降の人員と

観測資財の輸送方法は、宗谷の短艇甲板を拡張ヘリコプター甲板を新設、大型ヘリコプターによる輸送にきりかえる宗谷にとって画期的な変更を行なった。

12月16日(2003年)の朝日新聞紙上に“しらせ”船上から中山記者が次のような記事を送ってきた。「……“しらせ”は、16日午前2時現在、昭和基地から65キロの氷の海まで来た。南緯68度47分、東経38度39分。……“しらせ”は前日の15日、白く青く輝く大小の氷片が漂う流氷域に入った。その後、流氷のない湖のような海面に入った。大陸からつながる定着氷と流氷群の

すきまにできた穏やかな水路だ。“しらせ”は一気に加速し、1時間足らずで定着氷に到達。一面の氷の向こうに南極大陸が姿を見せた。」この水路こそ位置からして利根川水路に違いない。毎年この時期にある特定の位置に利根川水路のような開水面が存在するとすれば、自然の営みの中に生きている流水の不思議さを見る思いである。(1~3次宗谷・航海)

困ったコマーシャル

星合孝男

年のせいか、此の頃、どうしても良いような些細なことが気になる。気になるといつまで経っても、それにこだわって忘れられない。ここに書くことも、そんな一つである。

去年はNHKの人達が越冬して、南極の四季をテレビ画面に届けてくれた。今年の年賀状には「テレビで南極を見ました」と多くの方が書いて下さり、今更ながらにその威力を感じさせられたのであった。そして今年朝日新聞の記者とカメラマンのお2人が越冬中で、時々朝日の紙面には立派な写真と、隊員のプロフィール、仕事やイベントの紹介記事などが載る。昔と変わらないと思うことも、「へえ」と驚くこともあって

興味深い。いずれにしろ、我々南極OBにとっては、楽しみであり有難いことである。

しかし、朝日の南極放送活動に関連して、「困ったな。」と感ずることがある。それは現地からの記事、写真ではなく、放送活動のコマーシャルに就いてである。既にお気付きの方も居られるかと思うが、コマーシャル中の朝日新聞南極支局に就いてである。問題のくだりは、日本国内で活動していた中山由美記者が、昭和基地を思わせる雪の世界をペンギンと一緒に歩く状景である。そして問題はこのペンギン、チンストラップペンギンである。ある文献に依ると、チンストラップの繁殖地域は南極半島や亜南極の島々であるという。また、これらの地域に加えて、南極大陸の東経105度-165度の海岸を含む海域を生息地とする図があるが、これらのどの資料も昭和基地を含む南極大陸沿岸をチンストラップペンギンの生息地としてはいない。「ところで皆さん、宗谷、ふじ、しらせで昭和基地への往復途次、チンストラップをご覧になったことおありですか。基地周辺でチンストラップをご覧になった方おいでですか。」越冬隊員だって、アデリーペンギンとコウテイペンギンしか見ていないはずで

ある。そこでお願い一つ。皆さんご家族とご一緒にテレビ観賞中、もしこのコマーシャルに出会ったならば、ご家族、とくにお子様、お孫様に、「昭和基地にはこの種類のペンギンはいないのだヨ。」とおっしゃって下さい。

「今頃になってそんなこと言っただって。」とおっしゃる方もおありだと思う。が、実はテレビだけでなく、この3月、朝日新聞読者サービス用

印刷物に、このカットが使われているのを発見した。どうでも良いことかもしれないが、科学を標榜する南極観測に関連する活動に、明らかな誤りを含むコマーシャルはいただけない。こう考えて3月末に、旧知の朝日の元記者さんに、このコマーシャル何とかならないかと手紙を書いた。そして10月中旬の今日まで、その効果を待っていたのである。事情ご賢察の上ご容赦下さい。(16次冬・23次冬・28次夏、隊長)

南極倶楽部図鑑「最近の昭和基地の建物」

神田啓史(第45次観測隊長)

昭和基地が建設されてからかれこれ50年。基地の建物も年々変貌を遂げている。もし宗谷、ふじ時代の人々が今の基地に入ったとしたら、別な国の基地を訪問しているように思えるほど当時の面影が薄れているのではないだろうか。輸送船が大きくなると、物資量が増え、その半分を占める燃料も増える。観測隊員の数も物資量に応じて増えている。当然、建物も増え、貯油タンクも大きくなる。このおかげで充実した観測、豊かな南極生活が満喫できるというわけであるが、ここで、第45次観測隊の夏隊に参加した時に撮影した建物を眺めつつ、昭和基地のあるべき本当の姿を考えていきたい。



最新の昭和基地。手前右手に見える黒い目玉はインテルサットアンテナのレドーム。左手は多目的アンテナ。



山から見下ろすと管理棟を中心に建物が集中する。外出禁止令が出ると右往左往は昔も今も同じ。黄色い通路棟そばの青い2棟の建物は手前から污水处理棟、倉庫棟。



33 次で完成した管理棟。1 階から 3 階まで上に行くほど床面積が広くなるというデザインは南極の基地でも類を見ない。隊長室、厨房、食堂、医務室、娯楽室、図書室、通信室、倉庫がある。



37、38 次で完成した居住棟。合計 42 の個室がある。管理棟と同様に、基地のほかの建物と比べて一クラス上の荘重感をただよわせている。



35、36 次で完成した高床式の通路棟。ただの通路に「棟」をつけるだけの大きさと色を誇る。手前にこじんまりと鎮座しているのはかの第 1 次隊の食堂棟、後の娯楽棟（バー）である。現在は歴史的保存建物。



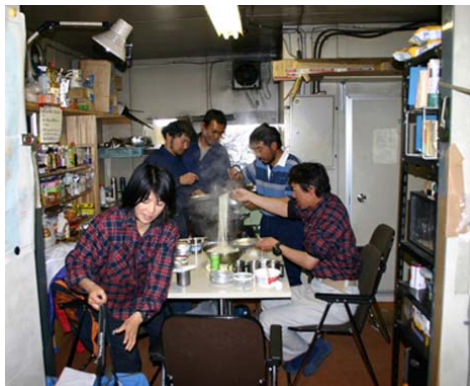
管理棟 2 階の娯楽棟（バー）。憧れのミラーボールがここにはあった。手術台として購入したというビリヤード台も健在。手前にバーのスタンドがある。



昭和基地の医療施設は管理棟 2 階の半分以上を占める。診察室ではインテルサット通信による遠隔医療が実現した。初めての女医さん、藤原ドクター。



管理棟 3 階の厨房。衛生的な広い空間が自慢。時々、居酒屋になるとか。4 人の女性越冬隊員が腕を振るうのを見ると時代は変わったと思う。



27次建設のリングホブデ生物小屋。今年、スカルプスネスに同様な小屋が完成した。隊員にとっては昭和基地の別荘でもある。



奥から順に、作業工作棟、仮作業棟、作業棟。25次隊の火事によって新たに建設された。



20次に夏期隊員宿舎を建設。現在、第1夏宿と呼ばれている。48ベッド、60名分の食事、風呂、トイレが用意されている。



左手は旧居住等を利用した第2夏宿、右手はヘリコプター待機小屋。



41次に建設した焼却炉棟。焼却炉のほかにも生ゴミの炭化装置が備わっている。



42次に建設した廃棄物集積庫。冷凍庫パネルを改造したものである。



野外でセスナ機のエンジンを交換する航空隊員。45 次隊で固定翼機の使用は最後となる。航空機関連の建物はついに一度も建設されなかった。



インテルサット衛星アンテナのレドーム。奥はシェルター。このアンテナで悲願のテレビ会議、インターネットが昭和基地でも可能となった。



発電棟前的高架式パイプライン。頑強なコンクリート土台と柱はパイプラインの物々しさを語っている。都市圏の高架ハイウエーを思い出す。



高架式パイプラインから引き継いで地べたを這うように走るパイプライン。見晴らし岩方面まで蜿蜒と続くが、完成までほど遠い。



100 kl の金属タンクとターボリン燃料タンクの撤去作業。見晴らし台には現在、7本の金属タンクが連座している。



44 次で建設した NHK ハイビジョン TV 放送で活躍した放送スタジオ棟。アンテナは撤去された。風下に衛星受信棟があり、雪ドリフトに悩まされた。



8次に建設された観測棟は、45次隊でガバリウム鋼板による外壁改修工事を施した。新居のように装いを新たにした。



41次に建設した第1廃棄物保管庫。環境問題が深刻になり、この建物以来、廃棄物関係の建物が急増しているのも時代を象徴している。



まるで廃棄物の中にうずまるようにしてまだ健在な11次建設の倉庫。居住区から離れた建物で火災を退避できる。生活用品、設営道具、非常食等重要な物資が収納されている。



ドームふじ基地から帰還した8人の44次越冬隊員。誰もがやせ細り、ドームの過酷な生活を思わせる。

— 編集後記 —

南極倶楽部「南極」も第20号を記念して以来、久しく影を潜め、1月以上も遅れて21号が発行されました。これまでの経験から、編集者は南極にいた方がいいのかもしれないと昨年の南極を懐かしむ今日この頃です。松原第46次隊長も成田を出発し、まもなく昭和基地に第1便到着です。それよりも、ドームふじ基地に向けて一足早く飛び立った航空隊7名はすでに基地に到着し、本

格的氷床掘削が始まりました。第45次越冬隊も元気な様子です。皆さん、何事もなく、無事に正月を迎えられることを祈っております。次号発行予定は1月14日です。1月5日までに原稿をお願いします。神田啓史
大学共同利用機関法人 情報・システム研究機構 国立極地研究所
〒173-8515 東京都板橋区加賀
1-9-10
Tel:03-3962-4761, Fax:03-3962-1525
E-mail: kanda@nipr.ac.jp